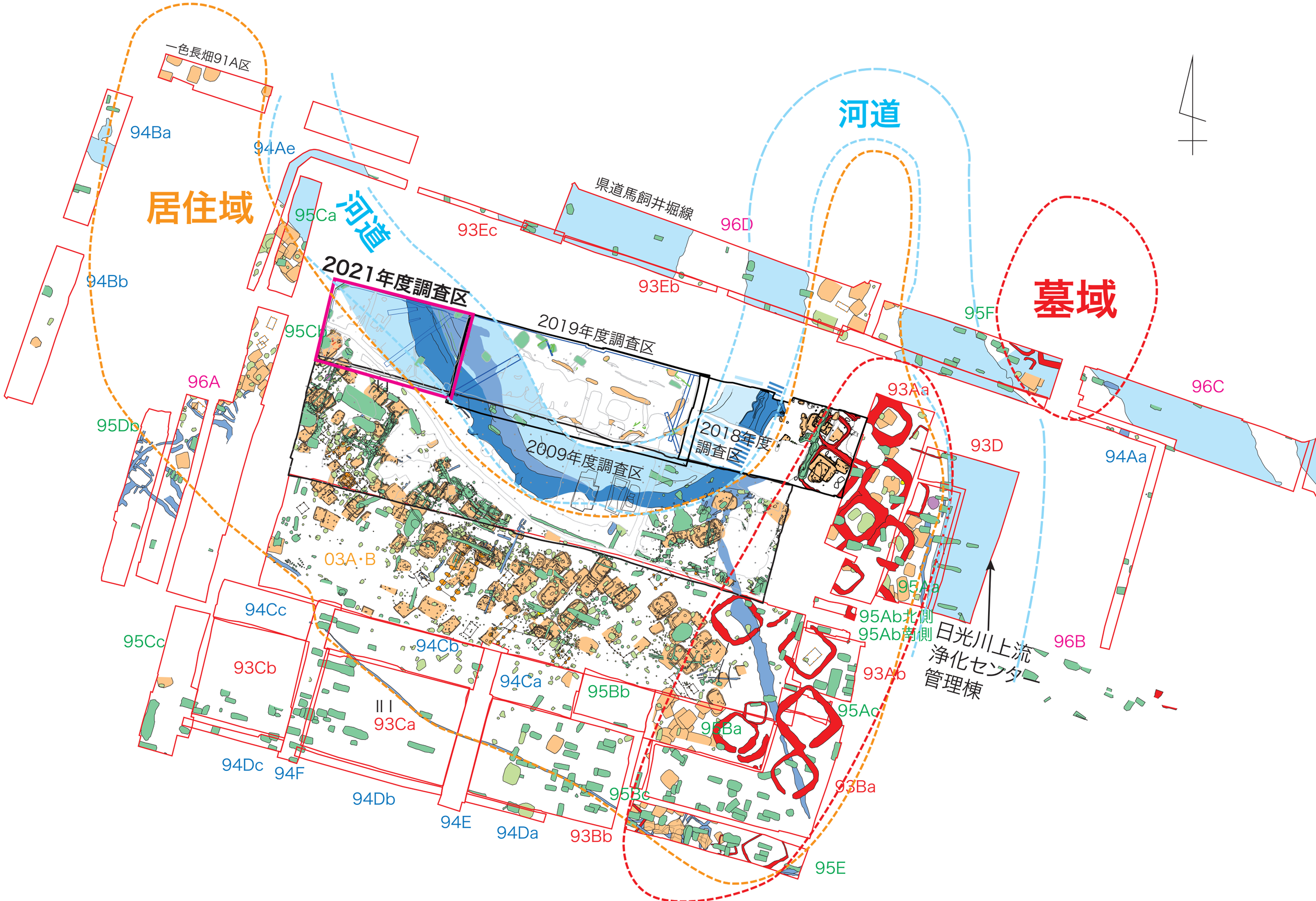
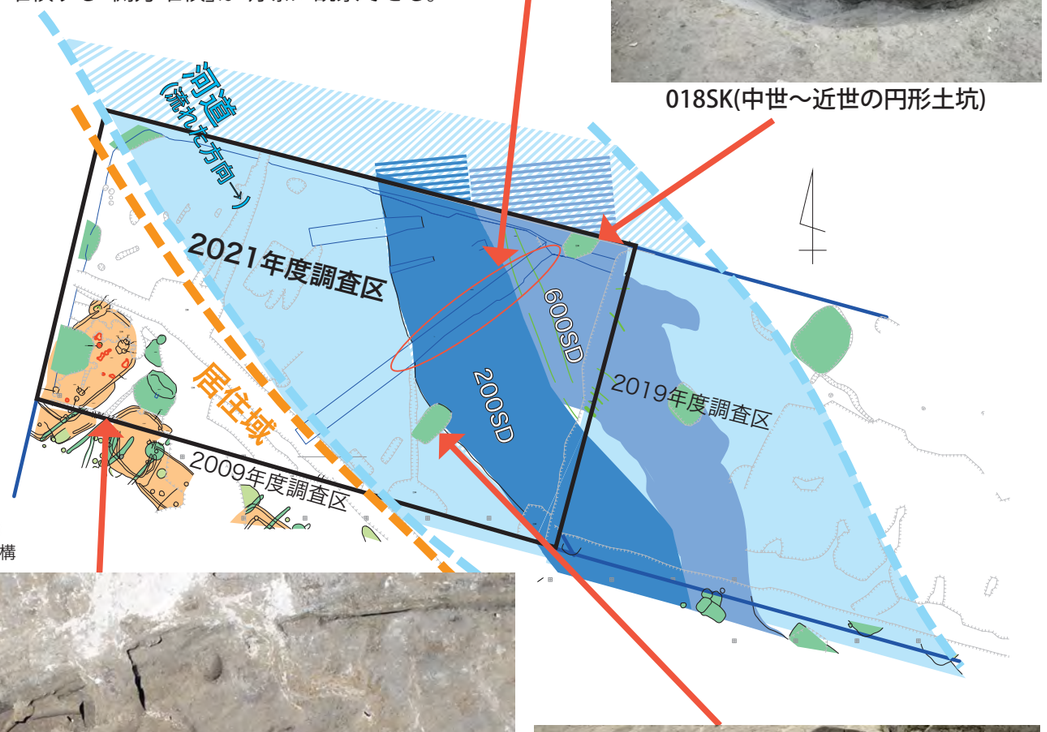
一色青海遺跡集落模式図（弥生時代中期後葉・約2100年前・S=1:1000）



断面に見える川と大溝の跡。古い順に600SD、200SDと掘削された。
断面には斜めに堆積する「側方堆積」が明瞭に観察できる。

018SK(中世～近世の円形土坑)



竪穴建物跡066・1313・1280SI。いずれも2009年度の調査で一部が検出されていた。

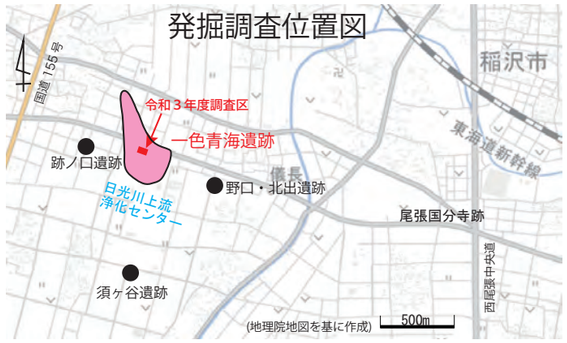
009SK(中世～近世の方形土坑、土が斑に混じる)

令和３年度 一色青海遺跡 発掘調査の成果

一色青海遺跡は、弥生時代中期と鎌倉～室町時代の遺構が分布する遺跡です。　平成５年度から日光川上流浄化センターの事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は行われてきました。本年度も５月より調査を行い10月に終了しました。

本年度の発掘調査では、主に弥生時代中期後半（約2100年前）の大きな溝（運河）２条、河川跡１条、竪穴建物跡（竪穴住居）３棟が検出されました。

いずれも2009年度、2019年度に検出されていた遺構に連続する部分であり、今回の発掘調査成果はそれらを引き継いだものとなっています。



弥生時代中期後半頃には最大で、東西約300m、南北約200mの居住域を持つ集落が存在していました。この集落は日光川上流浄化センターの中にすっぽりと収まるように存在し、集落域全体の2/3程が発掘調査された結果、その規模が明らかになっています。

この集落には、居住域に沿うように旧河道（川の跡）が見つかっていますが、これは集落にとって欠かすことのできないインフラ（基盤設備）だったようです。この川は砂が多く流れ、埋まり易い川でしたが、弥生時代中期後半の間に幾度も掘り返され、幅は5m以上に保たれていたようです。

しかし、最終的には流れてくる砂の勢いには抗えず、埋まってしまい、川の流れも大きく変わってしまいます。これは弥生時代中期の後半になって、降水量が多い気候になった（川の水量が増え、流れる砂も増加し、洪水なども頻発した）ことが原因とみられます。

その結果、一色青海遺跡に存在した弥生時代集落の存続期間は短く、約2100年前に100年間程営まれた後、別の場所へ移動したと考えられています。

調査機関：（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
調査業務委託：株式会社 島田組
調査期間：令和3年５月から10月
調査面積：1040㎡